

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 田村 和彦

本論文『現代中国における葬儀改革に関する研究—追悼会、火葬、公墓の民族誌的考察』は、文化人類学的手法により、中国陝西省における主に2000年から2016年までの長期にわたるマルチサイトドな参与調査によって得られた葬儀改革のデータに基づき、社会主義市場経済下における現代中国の「死」が、どのように処理され、表現され、経験されているか、その実態を民族誌的に解明したものである。現代中国の葬儀を特徴づけている追悼会とそれが催される殯儀館（葬儀場）、遺族には不可視化された火葬場、都市と農村では性格の異なる公墓（公共墓地）といった近代的装置が、いかなる歴史的推移を経て現状に至っているのか、清末から現在に至るまでの長いタイムスパンを設定しつつ、それらの社会的布置を、参与観察を中心に、現代中国の「死」の総体として把握しようとした点も、本論文の見るべき特徴だといえる。

論文は序章と終章を含む本文7章、補論1章の全8章で構成される。序章「本研究の目的と方法」では、問題提起として陝西省に多点的に広がる調査地点の概観と、中国の葬儀に関する先行研究の論点が整理され、本研究の枠組みが提示される。第1章「現代中国における葬儀改革と人の表象のあり方について—殯儀館における「追悼会」を中心に—」では、清末以来、国民国家形成のなかで、葬儀が、もっとも日常的で基準となるべき人間関係であった家族親族から切り離され、個人と国家が直接向き合う「死」の儀礼として創造されてゆく過程が析出されるとともに、それが「人民」の儀礼にとどまり、農村部の葬儀を刷新するには至らなかったことなどが示される。

第2章「火葬装置、技術の普及と労働現場の考察—新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して—」では、1949年以降、特に無神論の実践として普及した「火葬」という遺体処理方法の受容のプロセスを追跡するとともに、内部に入り込んだ綿密な参与観察によって、新技術も現場の従業員たちの身体知によって支えられている実像が描かれる。

第3章から第5章は、都市と農村では性格の異なる公墓の発生と展開が示されるとともに、例えば公墓案内所の従業員が、画一的な政策を伝える行政末端でありながら、民間知識との擦り合わせを行うなど、各現場における具体的な実践が描き出される。第3章「公墓をめぐる政策の展開と実践—地方都市における公墓政策の受容を例として—」では、中華民国期に形成されはじめた都市部における商品としての系譜と、内乱の戦死者などを祀った顕彰系の系譜があり、それらが混淆していったこと、また今日の現実の埋葬者には、葬儀改革の志向した目的とは乖離する、都市部の子孫のいない若年死亡者が多いことなどが照射される。

第4章「都市部の公墓にみる死をめぐる革命と民間知識の関係—社会的関節としての公墓案内所—」では、公墓購入希望者の要求に応えるように、「風水」や「孝子」などの民間知識を

利用しつつ、販売を行ってゆく案内所従業員の戦略を浮き彫りにすると同時に、死者を正しく安置するという実践から、新たな「孝」の紡がれてゆく状況も描出される。第5章「農村部における墓碑の普及と「孝子」たち—死者の記録とその変化」では、新たな習わしとなっている立碑に、名を記載された建立者たちの続柄を分析することによって、「孝子」の範囲が父系子孫を超えて、女性や傍系親族に拡張されている実際が読み解かれてゆく。

終章「葬儀改革からみる現代中国における死のありかた」では、政府上部における画一的な政策が、各章でみたように、下部の現場では、多様な現象として顕われてくるメカニズムとして、一元的に理解するモデルが提示される。その枠組みとして、中国史家プラセンジツト・デュアラが示した行政制度や集団と人びとをつなぐ「解釈の空間」という理解を発展させ、政策と民間知識のあいだを、その場その場で操作してゆく「社会的関節」という概念を新設して、その機能の解明と全体像のモデル化が試みられる。補論として置かれた「陝西省関中地域のある農村における死の儀礼」では、調査を開始した農村部「土葬」時代の葬儀を示すことによって、現在の「火葬」下の葬儀改革が、対比的、立体的に顕在化される。

このような内容をもつ本論文の学術的貢献は、以下の2点にまとめられる。第1に、本論文が文化人類学的な手法により長期のフィールドワークに基づいて執筆された点である。中国の葬儀に関する先行する民族誌的研究では、政策は、「外部」からもたらされた変化として部分的補足的に扱われるだけだった。それに対し本論文では、各種政策が末端に浸透してゆくプロセスを、各種の葬儀改革を執行する「社会的関節」機関の日常実践と、人びととの相互交渉のありように着目することで、真正面から丹念に描いてみせた。特に外側からは不可視である火葬場でなされた参与調査は細密であり、現代中国の「死」の消費をめぐるデータとして、本論文は今後参照されるべき極めて重要な基礎的研究になるものと予想される。

第2に、社会主義市場経済下の現代中国の葬儀のあり方から、現代中国の「死」をめぐる社会的布置を、大胆ながらも一定程度、点描できた点である。現代中国の葬儀を象徴する、追悼会、火葬場、公墓という複数の現場を、共時的な参与観察だけでなく、近過去の史資料も交えて清末から総体的に捉えたことは、今後の研究の方向性を明示した研究として貴重だと評価できる。あくまで見取り図ながら、さらにそれらを「社会的関節」という概念を介して、動的に把握する全体像を読み解く方途を切り開いたことは、葬儀に限らず、社会主義国家の諸現象を考察する上で、広い展望をもたらす可能性も秘めている。

とはいえ、本論文にはいくつかの課題が残されている。審査委員会では、本論文の論述のなかには、一般概念や用語の説明不足のため、読者の理解を困難にしている箇所や、調査地の地域特性などを掘り下げて論じ切れていない箇所が、散見することが指摘された。特に「社会的関節」概念は設定に再検討の余地があること、陝西地域の特性や条件が十分に読み込まれていないことなど、改善すべき点の少なくないことが問題となった。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの重大な瑕疵ではないことも審査員全員によって確認された。よって、本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格にふさわしいものと認められる。